

Ⅱ 研究ノートⅡ

聖書挿し絵本とプッサン

― 初期の作品をめぐる ―

栗田 秀法

はじめに

筆者は一九九九年に「プッサンとラファエッロ―借用と創造の秘密―」と題した版画の展覧会を企画・構成し、開催することができた。プッサンがローマに到着する以前のパリ時代にラファエッロやジュリオ・ロマーノの原画に基づく版画を研究したというベローリが伝える逸話、あるいはプッサンが千枚を超える版画のコレクションを所持していたというプッサン死後の報告を踏まえ、プッサンが版画からモティーフや構図を借用し、独自の作品に铸直すメカニズムの諸相をいくらかでも明らかにしようとするものであった。

デューラーらの創作版画あるいはラファエッロらに基づく複製版画に加え、書物の挿し絵もプッサンにとって重要な視覚的な着想源であった。例えば、コストロはプッサンのパリでの修業時代の神話を描いた素描群と一六世紀のオウイディウスの挿し絵との比較を試みている。また近年では、木村三郎氏が、《カミルスとファレリの教師》の構図の原型を一六世紀初頭に刊行されたティトス・リウィウスの『ローマ史』に付された挿し絵に見いだした。とはいえ、プッサンと挿し絵本との関係はいまだ十分に探求がなされたいえない状況にある。とくに、プッサンに多数の作例のある聖書を典拠にする作品についても、オスカー・ベッチマンが一九九二年に一六世紀後半にリヨンで刊行された聖書挿本とプッサンの作品との関連をいくつかの作品で示唆したり、別の研究者が《アシュドドのペスト》に関連して引き合いに出している程度である。このような状況の中で、最近グリーンは「七つの秘蹟」を扱った著作の中で、改めてプッサンにとっての聖書挿し絵本の重要性を強調している。実際、一七世紀には絵画化されることの珍しいとされてきたプッサンの主題の多くは、本稿で確認できるように、一六世紀後半から一七世紀にかけて多数刊行された各種の聖書挿し絵本のレパートリーにおおむね入るものなのである。

それでは、そのような聖書挿し絵本の刊行と流布の状況はいかなるものであったのであろうか。筆者は現在「一七世紀フランスにおける挿し絵本と絵画との関係についての総合的研究」(研究代表者 木村三郎)という科学研究費補助金による研究グループに参加し、聖書挿し絵本の実相を調査中である。より完全な聖書挿し絵本の

刊行状況と挿し絵レパートリーの詳しい報告は別の機会に譲るとして、最初にいわばその中間報告的なものとしてあらましをまとめておきたい。

1 一六世紀後半の聖書挿し絵本の概要―フランスを中心に―

一五世紀半ばに活版印刷術が発明されて以降ヨーロッパ各地で印刷業が盛んになるが、一六世紀初頭にはヴェネツィアがもつとも旺盛な活動を示すようになっていた。その後パリがそれをしのぐ活動を示すようになり、一六世紀半ばにもつとも盛んになったのが金融都市リヨンにおいてであった。ジュネーヴに近く、関係も深いリヨンには改革派も多く活動し、ラブレールの一連の著作が一五五二年から出版されたのもこの自由都市リヨンにおいてである。地中海貿易から新大陸の貿易への経済構造の変化に伴う金融資本の破綻と一五六四年のペスト襲撃、およびプロテスタント弾圧が引き金となった宗教戦争などによってリヨンは活気を失い、それに伴ってリヨンの出版業も低調なものとなっていった。⁽⁵⁾

ところで、出版された書物のおよそ一五パーセントほどを占めていたといわれる当時の挿し絵本には、エンブレム集、オウイディウス『変身物語』、聖書という三つの大きな柱があった。一五三二年にアウグスブルクで、一五三四年にパリで刊行された挿図付きのアルチャーティの『エンブレム集』は、リヨンでは二つの有力書肆ジャン・ド・トゥルヌとギヨーム・ルーエによって一五四七年と翌年に相次いで新たな挿図をつけて刊行された。⁽⁶⁾前者ではベルナル・サロモン (Bernard Salomon) が、後者ではピエール・ヴァーズ (Pierre Vase) が挿図画家として起用されている。『変身物語』については、ルーエがヴァーズを起用して一五五六年に、ド・トゥルヌはサロモンを起用して一五五七年に挿し絵付きの版を刊行している。⁽⁸⁾

それでは次に今回われわれが注目している聖書挿し絵本に移ることにしたいが、「聖書挿し絵本」なる語について若干補足が必要である。聖書の物語の挿し絵が書物の形で刊行される場合には二つのタイプが存する。一つは、ラテン語であれ俗語であれ通常の聖書テキストの合間に挿し絵が配される場合で、もう一つは図版を主にし、それに簡単なテキストが付されるタイプである。聖書の挿し絵は後者のために挿図が大量に作られる場合が多く、それらの挿し絵はしばしば聖書に挿入するのにも流用されている。後者のタイプをプランの分類に従い「聖書絵本」(Figures de la Bible) と呼び、ここではそうした絵本に限って議論を進めることにしたい。プランの調査によると以下に掲げるおおよそ六つの系統の旧約聖書を含む聖書絵本が一六世紀フランスで刊行されている。⁽⁹⁾

(1) 『聖書絵本』パリ、一五二〇年 [Les Figures du viel Testament et du nouvel, Paris, c.1520.]

- (2) ハンス・ホルバイン(子) 挿図『絵入り旧約聖書』リヨン、一五三八年 [Historiarum Veteris Instrumenti icones ad vivum expressae, Lugduni, Melchior et Gaspar Trechsel fratres (Melchior et Gaspard Trechsel), 1538.]
- (3) クロード・パラダン作ベルナル・サロモン挿図『四行詩付き聖書物語』リヨン、一五五三年 [Claude Paradin, *Quadrins historiques de la Bible*, Lyon, Jean de Tournes, 1553.]
- (4) ギヨーム・ゲルー作ピエール・ヴァーズ挿図『八行詩付き聖書物語』リヨン、一五六四年 [Guillaume Gueroult, *Figures de la Bible illustrée de huitains francoys*, Lyon, G. Rouille, 1564.]
- (5) ガブリエル・シャピュイ作『韻律詩付き聖書物語』リヨン、一五八二年 [Figures de la Bible déclarées par stances, par G. C. T. Augmantées de grand nombre de figures aux Actes des apostres, Lyon, Barthelemi Honorati, 1582]
- (6) 『聖書絵本』パリ、一六一四年 [Figures de la sainte Bible accompagnées de brieis discours, contenant la plus grande partie des histoires sacrées du Vieux & Nouveau Testament... pour l'instruction & contentement des ames dévotes & contemplatives, accompagnées de brief discours..., Pais, Jean Le Clerc, 1614.]

リヨンで聖書絵本の出版に先鞭をつけたのは、一五三八年にフレロン兄弟の書肆がトレクセル兄弟の印刷所で刊行した四ツ折版の『絵入り旧約聖書』である。ここには、ハンス・ホルバイン(子)原画の木版画が九二点収録されて、ラテン語とフランス語による物語の簡単な説明が付されている。この絵本は同じ書肆から翌年再版されたのち、一五四七年に再版され、二年後には英語版、スペイン語版が出されている。¹⁰⁾

この聖書絵本の成功に目をつけたリヨンの書肆ジャン・ド・トゥルヌは、お抱えの画家ベルナル・サロモンを起用し、トレセルの絵本より小型の八ツ折版で一五五三年に『四行詩付き聖書物語』を刊行した。これには、旧約聖書・創世記、出エジプト記について一九九点の図版が収録されている。同じ年には、英語版(図版一九四点)がド・トゥルヌから刊行され、翌年には、スペイン語版(図版一四二点)、イタリア語版(図版二二八点)、フラマン語版(図版一四九点)の絵本が同書肆から刊行された。また、同年には新約聖書にも挿図を収載した聖書が、ラテン語版、フランス語版と相次いで刊行されている。一五五五年にはフランス語版絵本の第二版が刊行され、二二二点の挿図がつけられた。その後もさまざまな版が刊行されている。¹¹⁾ジャンは改革派の信徒であったが、異端者として処刑されたエティエンヌ・ドレとは異なり、商売を重んじ、とくに反カトリックの姿勢は出版物には見せなかった。

『エンブレム集』『変身物語』でド・トゥルヌと対抗し、敬虔なカトリック信徒であった書肆ギヨーム・ルーエは、やや遅れて一五六四年に八ツ折版の『八行詩付き聖書物語』を刊行した。ここにはお抱え画家ピエール・



fig.1-b
作者不詳《ヨシュアのアマレクとの戦い》(Venice 1574)



fig.1-a
ニコラ・プッサン《ヨシュアのアマレクとの戦い》
エルミタージュ美術館、サンクト・ペテルブルク

ヴァーズ（エスクリッヒ）による新・旧約聖書あわせて二六六点の図版が収録された¹²⁾。その後リヨンの書肆オノラは、フラウィウス・ヨセフスのユダヤ古代史とユダヤ戦記を収めた著作を一五六九年に刊行し、前者に挿図をつけた。ここで用いられた挿図は、一五八二年に同じ書肆から八ツ折版の『韻律詩付き聖書物語』として刊行されている（図版は使徒行伝を含め四三〇点）。

その後リヨンからは新たな版は作られなかったが、パリの書肆ジャン・ル・クレールから一五九六年に横長の四ツ折版で『新・旧約聖書物語』が刊行され、その図版は同書肆から一六一四年に刊行された二ツ折版『聖書絵本』（図版は旧約が一五八点、新約が二二一点）によって流布した。

このように聖書挿し絵本は、Illustrated Bartsch や New Hollstein に比すべき画像の一大宝庫といえるものである。次に、一七世紀には絵画化されることの少なかった主題といわれるプッサンの初期のいくつかの作品について、挿し絵本との関係を振り返ることにしたい。

2 プッサンの初期の旧約聖書作品と聖書挿し絵本

プッサンは、ローマに到着した一六二四年から一六三〇年頃にかけて当時としては絵画化されることのまれな旧約聖書に取材した作品を五点描いている。そのうちの三点はローマ到着間もない一六二五年前後に描かれた《ヨシュアのアマレクとの戦い》《ヨシュアのアモリ人との戦い》《ギデオンのミディアン人との戦い》である。後の二点《アシュドドのペスト》《ダビデの凱旋》は一六三二―三三年前後に描かれた。それでは、これらの主題は前述した聖書挿し絵本でどのように扱われているのであるのか。「ラファエッロの聖書」として親しまれているヴァチカンのロッジアの聖書サイクル（二五一八―一九年頃）と、ドイツやフランドルで刊行された一六世紀後半からの一七世紀前半の代表的な挿し絵本も加え一覧表にしてみた¹³⁾。挿し絵本によりレパートリーがかなり異なっていることがわかる。

	アマレク人	アモリ人	ギデオン	ペスト	ダビデ
ヴァチカン・ロッジア	×	○	×	×	×
Beham 1537	○	○	×	×	×
Holbein 1538	×	×	×	×	×
Hirschvogel 1550	○	×	×	×	○
Salomon 1553	○	×	○	×	×



fig.2-b

ラファエッロの工房《ヨシュアのアモリ人との戦い》



fig.2-a

ニコラ・プッサン《ヨシュアのアモリ人との戦い》

プーシキン美術館、モスクワ

ヨシュアは、モーセの命じたとおりに実行し、アマレクと戦った。モーセとアロン、そしてフルは丘の頂に登った。モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になり、手を下ろすと、アマレクが優勢になった。モーセの手が重くなったので、アロンとフルは石を持って来てモーセの下に置いた。モーセはその上に座り、アロンとフルはモーセの両側に立って、彼の手を支えた。その手は、日の沈むまで、しっかりと上げられていた。ヨシュアは、アマレクとその民を剣にかけて打ち破った。

この図像の特徴としては、画面に両手を支えられるモーセの姿が描き込まれることが挙げられる。プッサンの作品では、前景に激しい戦闘の様子が描かれ、背景の丘の上にアロンとフルに支えられたモーセの姿が描き込まれている。

挿し絵の伝統を振り返ってみると、二つの伝統が存在していたことがわかる。一つは両手を支えられるモーセを前景に表し戦闘の情景を背景に描くものである (Beham; Stimmer; Venice 1574 (fig.1-b); Tempesta-Merian)。もう一つは前景に戦闘を、背景にモーセの姿を描き込むものである (Hirschvogel; Salomon; Eschrich (fig.1-c); Amman; Jode; Le Clerc (fig.1-d))。ル・クレールの挿し絵では、画面の左手にモーセが、右側に戦闘の場面が描かれている。

プッサンの作品の前景で目を惹くのは、矢を射る人物と槍を投げる人物である。プッサンと同じタイプの挿し絵のうち、前景に矢を射るモチーフを描いていないのはテンペスタ・メリアンの挿し絵のみであり、プッサンは挿し絵本の多くで描かれたこの表現を踏襲している。槍を投げる人物に関しては、馬上からの場合が挿し絵の場合は多い。全体としてはエスクリヒの挿し絵 (fig.1-c) とモチーフ的には共通するところが大きい。

プッサンの作品の前景には、他の二点でも同様だが、非常に姿態的印象的な人物が配されている。これらは古代彫刻やルネサンスの巨匠たちからの引用があることが指摘されている。プッサンでは主人公のヨシュアの姿が中景にはっきり描かれていることも一つの特徴といえよう。

イ《ヨシュアのアモリ人との戦い》 (Fig.2-a)

この作品の典拠は、「ヨシュア記」10:12-14の次の章句である。

主がアモリ人をイスラエルの人々に渡された日、ヨシュアはイスラエルの人々の見ている前で主をたたえて言った。

「日よ とどまれ ギブオンの上に



fig.2-d

ル・クレール《ヨシュアのアモリ人との戦い》



fig.2-c

エスクリヒ《ヨシュアのアモリ人との戦い》

月よ とどまれ アヤロンの谷に。」

日は とどまり

月は 動きをやめた

民が 敵を打ち破るまで。

『ヤシエル』にこう記されているように、日はまる一日、中天にとどまり、急いで傾こうとしなかった。

この図像の特徴は、動きを止めた日と月が背景に描き込まれることである。またしばしば、引用した章句の少し前で、数多くの敵が電で打たれたことが記されているため、降電の場面が描かれる。サロモンの挿し絵では前景に電が降っているが、その他の挿し絵では中景もしくは背景に電の落下が描かれている。ブッサンの絵では定かでない。

ブッサンの作品は、ラファエッロの工房によるヴァチカンのロッジアの同主題の作品 (fig. 2-b) から、周りから際立つ騎乗人物、盾で身を覆う倒れた人物等、多くを負っている。

ブッサンの作品の前景には剣で敵を倒す人物が、中景には馬上から槍を突き刺す人物が描かれている。こうした表現は、エスクリヒの「アマレク人」 (fig. 1-c) や「アモリ人」の挿し絵 (fig. 2-c) に似た表現を見ることができる。またブッサンの作品では背景に山塊があるが、これはエスクリヒやル・クレールの挿し絵 (fig. 2-d) に見られるものである。またこの作品においても、前景の人物にはボルゲーゼの戦士などからの引用等が見られる。

ウ《ギデオンのミディアン人との戦い》 (fig. 3-a)

この作品の典拠は、「士師記」7:19-21の次の章句である。

ギデオンと彼の率いる百人が、深夜の更の初めに敵陣の端に着いたとき、ちょうど歩哨が位置についていたところであった。彼らは角笛を吹き、持っていた水がめを砕いた。三つの小隊はそろって角笛を吹き、水がめを割って、松明を左手にかざし、右手で角笛を吹き続け、「主のために、ギデオンのために剣を」と叫んだ。各自持ち場を守り、敵陣を包囲したので、敵の陣営は至るところで総立ちになり、叫び声をあげて、敗走した。

絵画では珍しいこの図像も、聖書挿し絵本にはいくつかの作例があり、角笛を吹き、割れた水瓶の松明をもつ兵士の行進がこの図像の特徴となっている。背景に角笛を吹く兵士たちが描かれている類型 (Amman; New Hollstein, Heemskerck, no.82; Tempesta) と、前景に角笛を吹く兵士の行進が描かれる類型がある (Salomon



fig.3-b

B. サロモン《ギデオンのメディア人との戦い》



fig.3-a

ニコラ・プッサン《ギデオンのメディア人との戦い》ヴァチカン絵画館

(fig.3-b): Jode; Le Clerc (fig.3-c)。プッサンは後者の類型に従っている。なお、挿し絵本では左手に角笛を持つ兵士が多いが、これは版に移す際に逆になってしまったのかもしれない。プッサンは聖書の字句どおりに描いている。

聖書の伝えるように夜景として描いているのは、ヨードとテンペスター・メリアン (fig.3-d) である。とくに後者では角笛を吹く兵士は中景に退いているが、前景には短縮法で描かれたこちらに向けられた馬のお尻が描かれている。プッサンの作品にも馬の尻がはつきり描かれており、テンペスターの作品がヒントになった可能性がある。ここでもまた、前景の人物にはさまざまな引用が指摘されている。

(2) 一六三〇年前後の作品

ア《アシユドドのペスト》(fig.4a)

この作品の典拠は、「サムエル記上」5の次の章句である。

ペリシテ人は神の箱を奪い、エベン・エゼルからアシユドドへ運んだ。ペリシテ人は神の箱を取り、ダゴンの神殿に運び入れ、ダゴンのそばに置いた。翌朝、アシユドドの人々が早く起きてみると、主の箱の地面にダゴンがうつ伏せに倒れていた。人々はダゴンを持ち上げ、元の場所に据えた。その翌朝、早く起きてみると、ダゴンはまたも主の箱の前の地面にうつ伏せに倒れていた。しかもダゴンの頭と両手は切り取られて敷居のところにあり、胴体だけが残されていた。(中略) 主の御手はアシユドドの人々の上に重くのしかかり、災害をもたらしした。主はアシユドドとその周辺人々を打って、はれ物を生じさせられた。

絵画化されることのまれなこの主題も、聖書の物語を事細かに映像化している挿し絵本の世界では、実はそれほど希少なものではない。祭壇の前に倒れて胴体と頭部と手が切り離れたダゴンの像とそれを見守る人物を表現するという点でおおむね表現は共通している。プッサンの絵にはねずみが描き込まれているが、これはいくつかの挿し絵にも登場するものである (Solis; Amman (fig.4b); Courboin, no.60 (fig.4c); Merian (fig.4d))。興味深いのはメリアンの挿し絵で (fig.4d)、プッサンの作品と同じように、祭壇が側面から描写されている。

プッサンは一六三一年に制作されたこの作品で、疫病とも関連するこの主題を、「フリギアのペスト」という、疫病と関係するがまったく別の主題のラファエッロに基づく版画 (Nagoya/Ashikaga 1999, no.9-2) の世界とを融合してプッサン独自の表現を生み出した。初期の戦闘図とは図像的な伝統とのスタンスがまったく異なっており、新たな制作意欲に向けての図像的な伝統の換骨奪胎の態度を見ることがができる。主題を深く検討し、構想に新境



fig.3-d

M. メリアン 《ギデオンのみディアン人との戦い》
(A. テンペスタに基づく)



fig.3-c

ル・クレール 《ギデオンのみディアン人との戦い》

地を開いていく態度こそ一六三〇年代のブッサンの特徴づける特色である。ブッサンの構想に分け入るには、図像学の枠内にとどまっても不十分で、画像生成の探求が要求されてくる。

イ 《ダビデの凱旋》 (fig. 3-a)

一六三二年頃に描かれたブッサンの作品の典拠は、「サムエル記上」18の次の章句である。

皆が戻り、あのペリシテ人を討ったダビデも帰って来ると、イスラエルのあらゆる町から女たちが出て来て、太鼓を打ち、喜びの声をあげ、三絃琴を奏で、歌い踊りながらサウル王を迎えた。

挿し絵本の表現では、騎乗するサウルとともにゴリアテの首とともに歩むダビデの姿と城門の前でそれを出迎える女たちという表現が一般的であった。それと異なるのがテンペスタ・メリアンの挿し絵で、ダビデが騎乗している。

ダビデは通例ゴリアテとの戦いに用いられた剣を持っているが、そのダビデがゴリアテの首をどのように運ぶかについては二つのパターンがある。もともとの多いのがダビデが首を手にもつもので (Hirschvogel; Eschrich; Venice 1574; Le Clerc (fig. 5-b))、もう一つはブッサンの作品におけるようにゴリアテの首を竿に刺して高く掲げることができる。後者は中世から続く一つの伝統で、例えば『グリマーニの聖務日課書』にそうした表現を見ることができ。こうした表現は後代に受け継がれ、ルカス・ファン・レイデンに基づくサーンレダムの版画 (fig. 5-c) では、ダビデがゴリアテを倒した剣の先にゴリアテの首を差して高く掲げ、シュティンマーの版画においても受け継がれている (fig. 5-d)。ダビデが持っているわけではない竿に刺された首の表現は H・S・ベハムによる別の版画にも見られる (ウオーバーク研究所写真資料室資料による)。また、いわゆる異時同図で描かれたフランス一六世紀末に制作されたと見られるある版画 (Courboin, no. 71) では中景にそうした表現を見ることができ。

こうしてみると、ブッサンは明らかに図像の伝統的表現を踏まえていることがわかる。ただ、「ペスト」と同じように、ここでは図像の伝統的形式と、ジュリオ・ロマーノに基づく別の主題の版画 (Nagoya/Ashikaga 1999, no. 82) に見られる建築的な枠組みや人物構成とを融合して、一見したところさほどブッサンが図像を意識していないようなまったく別の世界を作り出していることである。それによって、門の前で出迎える女たちという挿し絵本に見られた定式を破り、門をくぐった後のダビデの凱旋というまったく新しい図像表現を生み出しているのである。



fig.4-b

J. アマン 《ダゴンの倒壊》



fig.4-a

ニコラ・プッサン 《アシュドドのベスト》ルーヴル美術館、パリ

おわりに

改めて挿し絵本などを調査することによって同主題の作品と比較してみると、プッサンが当初からいかに図像的な伝統をよく調べているのかがわかる。もちろんどの挿し絵本を参照したかは容易に特定できないし、無理に断定することもないであろう。ただ、これまでのように図像的な伝統を重視しないうでなされた議論は、プッサンの制作態度や意図に反するであろうから、本稿においてあえて挿し絵本というものに注意を促した次第である。ここで行った議論を踏まえた画像生成や解釈の問題については、別の機会により広い見地から行うことにしたい。

文献略号

Courboin: F. Courboin, *Bibliothèque nationale. Département des estampes. Catalogue sommaire des gravures et lithographies qui composent la Réserve*, Paris, 1900-1901, 2vols.

London: Nicolas Poussin 1594-1665 (exh.cat.), Royal Academy of Arts, London, cat. by R. Verdi.

Nagoya/Ashikaga 1999: Poussin and Raphael. *Exhibition realized by the special cooperation of Bibliothèque nationale de France* (exh.cat.), Aichi Prefectural Museum of Art, Nagoya/Ashikaga City Museum of Art, 1999

Paris: Nicolas Poussin 1594-1665 (exh.cat.), Grand Palais, Paris, 1994-1995, cat. by P. Rosenberg.

Thuillier: J. Thuillier, *Poussin*, Paris, 1994.

TIB: *The Illustrated Bartsch*, The University Park, Pa./New York, 1971.

Zolotov et al.: Y. Zolotov et al., *Nicolas Poussin. Musée de l'Ermitage. Musée des Beaux-Arts Pouchkine*, Paris, 1990.

聖書は新共同訳に準拠した。

註

1 J. Costello, "Poussin's Drawings for Marino and the New Classicism: I-Ovid's Metamorphoses", *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, XVIII, 1955, p.296.

2 S. Kimura, "A propos de Camille et le maître d'école de Faleries: aspects iconographiques", *Nicolas Poussin (1594-1665). Actes du colloque*, 2vols., Paris, 1996, vol.1, p.503.

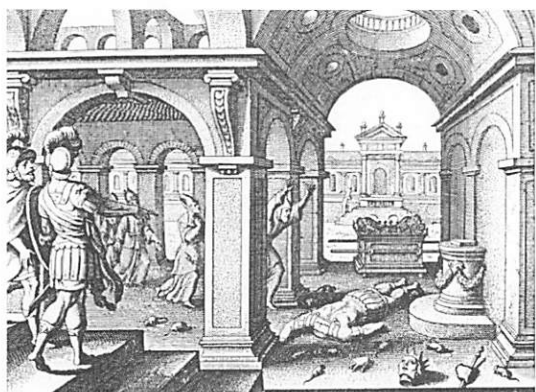


fig.4-d
M. メリアン 《ダゴンの倒壊》



fig.4-c
作者不詳 《ダゴンの倒壊》

- 3 O. Bätschmann, *Dialektik der Malerei von Nicolas Poussin*, Zurich/Munich, 1982, p.83, 85; C. M. Boeckl, "A New Reading of Nicolas Poussin's *The Miracle of the Ark in the Temple of Dagon*", *Artibus et Historiae*, XII, 24, 1991, p.119-145.
- 4 T. Green, *Nicolas Poussin paints the seven sacraments twice: an interpretation of figures, symbols and hieroglyphs, together with a running commentary on the paintings, the drawing and the artists' letters*, Somerset, 2000, pp.98-101.
- 5 出版の歴史については、リュシアン・フェーヴル／アンリ・ジャン・マルタン『書物の出現』（関根素子・長谷川輝夫・宮下志朗・月村辰雄訳）上・下、ちくま学芸文庫、一九九八年刊、を参照。（上）の二二九―二七三頁には、書物における挿し絵の誕生と変遷についての詳しい記述がある。リヨンにおける出版活動については、宮下志朗『本の都市リヨン』晶文社、一九八九年刊、に詳しい。
- 6 詳細は、アンドレア・アルチャーティ『エンブレム集』（伊藤博明訳）ありな書房、二〇〇〇年刊、に譲る。
- 7 *Trois premiers livres de la Metamorphose d'Ovide, traduitz en vers François. Le premier et second, par Cl. Marot. Le tiers par B. Aneau ... Illustré de figures ... Avec une preparation de voie à la lecture & intelligence des poëtes fabuleux*, G. Roville: Lyon, 1556.
- 8 *La Metamorphose d'Ovide figurée, lan de Tournes*, Lyon, 1557. 『変身物語』の挿し絵については、M. D. Henkel, "Illustrierte Ausgaben von Ovids Metamorphosen im XV., XVI. Und XVII. Jahrhundert", *Vorträge der Bibliothek Warburg*, 1926-1927, pp.58-144; G. Duplessis, *Essai bibliographique sur les différentes éditions des oeuvres d'Ovide ornées de planches publiées aux XVIe et XVIIe siècles*, Paris, 1889, が基本文献。
- 9 R. Brun, *Le livre français illustré de la Renaissance*, Paris, 1969, pp.130-134. この文献にはフランス国立図書館に所蔵されているものについて所蔵番号が付されている。聖書の印刷本およびその挿し絵の歴史については、次の文献が基本的な手がかりを与えてくれる：French 16th century books (Harvard College Library Department of printing and graphic arts: catalogue of books and manuscripts; part 1) / compiled by Ruth Mortimer, under the supervision of Philip Hofer and William A. Jackson, 2v., Cambridge, Mass., 1964 (以下「ハーバード 略記」)；La Bibbia a stampa da Gutenberg a Bodoni (exh.cat.), Biblioteca Medicea Laurenziana/Biblioteca nazionale Centrale, Florence, 1991 (以下「フィレンツェ 1991 略記」)。
- 10 リヨンにおける聖書挿し絵本の成立については、M. Audin, *Les peintres en bois et les tailleurs d'histoire à propos d'une collection de bois gravés conservée au Musée de l'imprimerie et de la Banque*, Lyon, 1967; *Histoire de l'édition française*, sous la direction générale de H.-J. Martin et R. Chartier, t.I, *Le livre conquérant*、

Du Moyen Âge au milieu du XVIIIe siècle, Paris, 1982, p.270. を参照。ホルバインの聖書については、Harvard, nos.276-283; Florence 1991, no.70 を参照。

- 11 ベルナール・サロモンについては、N. Rondot, *Bernard Salomon*, Lyon, 1987 が未だに基本文献。Bernard Salomon, Geneva, 1969 には、サロモンの旧約挿し絵すべてが複製され、巻末にはどの版にどの挿し絵が掲載されていたかの一覧表が掲載されている。また、サロモンの聖書については、Harvard, nos.80-89; Florence 1991, no.91 も参照。ジャン・ド・トゥルヌについては、宮下、前掲書、二八三―二九七頁にまとめた紹介がある。

- 12 Cf. Harvard, no.92-93; Florence 1991, no.97. ルーエについては、宮下、前掲書、三〇五―三二三頁を参照。

- 13 Cf. Harvard, no.101. 一五九六年の版 (*Plusieurs et diverses histoires tant du Viel que Nouveau Testament*, Paris, Jean Le Clerc, 1596.) では、横長の四ツ折版の左頁にテキストが、右頁に図版が掲載されたが、一六一四年版では縦長頁の上部に図版が、下部にテキストが配された。一五九六年版は現存数が極めて少ないといわれる。挿し絵の原画はジャン・クーザン (子) によるものという説が提唱されてきた (A. P. F. Robert-Dumesnil, *Le peintre-graveur français ou catalogue raisonné des estampes gravées par les peintres et les dessinateurs de l'école française*, t.9, Paris, 1865 (réimpression F. de Nobele, Paris, 1967), p.11-12; Ambroise Firmin-Didot, *Etude sur Jean Cousin: suivie de notices sur Jean Leclerc et Pierre Woertot*, Geneva: Slatkine, 1971 (reprod. en fac-sim. de l'éd de Paris, impr. de A. Firmin-Didot, 1872), pp.143-145; H. Lehmann-Hauot, *An Introduction to the Woodcut of the Seventeenth Century*, New York, 1977, pp.136-138) が、現在ではその周辺で制作されたことが疑いないことは、否定されている (H. Zerner, *L'art de la Renaissance en France. L'invention du classicisme*, Paris, 1996, p.284.)。

- 14 前章で紹介したフランスにおける聖書挿し絵本の他、フランス以外で刊行された以下の挿し絵本も調査することができたので、以後の考察にも利用する。

ア ガブリエル・シメオーニ作『韻律詩付き聖書物語』一五七四年 [Figure del Vecchio Testamento, illustrate di bellissime stanze volgari da Gabriel Simeoni. Nuovamente ristampate... - Figure del Nuovo Testamento... Vinegia: gli heredi di N. Bevilacqua, 1574]

イ ゲラルディ・デ・ヨード作『聖書宝典』一五八五年 [Gerardi de Jode, *Thesaurus sacrarum historiarum Veteris Testamenti elegantissimis imaginibus expressus excellentissimorum in hac arte virorum opera, nunc primum in luce editus sumptibus atque expensis Gerardi de Jode... Thesaurus Novi Testamenti elegantissimis iconibus expressus, continens historia atque miracula domini Nostri Jesu Christi*, S.l., 1585]

ウ マトイス・メリアン挿図『聖書絵本』一六二五—二七年「実際に参照したのは、*Iconum Biblicarum, arte chalcographica & poetica praecipuas S. Scripturae historias perquam eleganter repraesentantium*, Frankfurt, 3vols., 1638-1643] メリアンの聖書は、次の書物で図版が復刻されている: Matthaeus Merian, *Die Bilder zur Bible mit Texten aus dem Alten und Neuen Testament*, Hamburg, 1965. メリアンの聖書は、自らの構想によるのではなく、アントニオ・テンペスタなど、さまざまな作家の版画をコピーしている。

また、Illustrated Bartsch 叢書には、ドイツの聖書挿し絵本がいくつか紹介されているので、下記のことを表に追加した。

Beham 1537: *Biblicae historiae artificiosissime depictae*, Frankfurt, 1537 (TIB 15)

Hirschvogel 1550: *Vorredt und eingang der Concordanzen alt und new Testaments durch Pereny Petri*..., Vienna, 1550 (TIB 18)

Amman 1565: *Biblia. Das ist die ganze heilige Schrift Teutsch. D. Mart. Luther*..., Frankfurt, 1565 (TIB 20-1)

Solis 1565: *Bibliche Figuren des Alten Testaments ganz kunstlich gerissen*..., Nürnberg, 1565 (TIB 19-1)

Stimmer 1576: *Neue Kunstliche Figuren Biblischer Historien grundlich von Tobia Stimmer gerissen*..., Basel, 1576 (TIB 19-2)

Tempesta: A series of 220 illustrations of the Old Testament (TIB 35)

15 Zolotov et al., no. 2; Thuillier, no. 17; Paris, no. 7

16 Zolotov et al., no. 3; Thuillier, no. 18; Paris, no. 6

17 Thuillier, no. 21; *Intorno a Poussin. Dipinti romani a confronto* (exh. cat.), Galleria Nazionale d'Arte Antica Palazzo Barberini, 1994-95, no. 2.

18 Thuillier, no. 81; Paris, no. 43; H. Keazor, "A propos des sources littéraires et picturales de La Peste d'Asdod (1630-1631) par Nicolas Poussin", *Revue du Louvre*, 1, 1996, p. 62. ベックルも挿し絵の伝統を振り返っているが、不十分である (Boeckl, *op.cit.*)^o

19 Thuillier, no. 91; London, no. 24

〈本稿は、平成二二、一三年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))「17世紀フランスにおける挿し絵本と絵画の関係についての総合的研究」による研究成果の一部である。〉



fig.5-c
サーンレダム《ダビデの凱旋》（ルカス・ファン・レイデンに基づく）



fig.5-a
ニコラ・ブッサン《ダビデの凱旋》ダリッチ美術館



fig.5-d
T.シュティンマー《ダビデの凱旋》



fig.5-b
ル・クレール《ダビデの凱旋》